

(銀のエンジェル賞 中学生の部)

怪盗だった日

中二・若林 光

俺は青山郁。「郁」で「かおる」って読む。俺は今、N美術館の中で警察に追われて走っている。肩にのった小さなアイツのせいだ……。

今日の帰り、一日中部活をしていた俺はとても疲れていた。

森のそばを歩いていたとき、どこからか

「おーい、ここや。気付いてくれえー」

という声が聞こえてきた。空耳かと思ひ、あたりを見回すが、誰もいない。

すると今度は、

「あんたの上や。う、え！」

と言われ上を向くと、いたいた、周りの木々にまぎれてまっ黒い……

「リス!? しやしや、しやべった!?」

「リスがしやべったら悪いんか? それより、降りるの手伝うてくれ。降りられへんようになってもうた」

降りられないなら登るなよ、と思ひながらリスを降ろす。

「おおきに。あんた歳はなんぼ？」

「じゅ、十三歳です」

「そうか。根性もありそうやし、体もごつついし、ちようどええなあ」

初めて会ったリスに体がごついとか言われたくない。でも、ちよ
うどいい、と言われたとき、嫌な予感がした。すぐに逃げていれば、
と悔やまれる。しかし、もう遅かった。

「ほな行くで。ついてきな」

どこへ、と聞く暇もなく森へ進んでいくリスは一人（一匹？）で
話しはじめた。

「わいはクロ、いうんや。わいはなあ、怪盗なんや」
嫌な予感が強まる。

「降ろしてくれた奴を一人つれていこ、思っと思ったんやけど、ちよ
うどええわ、手伝どうて。あんたラッキーやわ。人間用のスーパ
ースーツが一着だけあんねん。でも良かったわ。誰も降ろしてくれ
んの。あんたら人間が一番優しいわ」

しまった。気付いたのがいけなかったのか。後の祭りとはこのこ
とだ。そんなことを考えていると、広い場所に出た。

「ついたで、えーっと……」

そう言えば名乗っていなかった。

「青山郁です」

「郁くんか。ええ名前や。ここが俺の基地、ブラックハウスや。か
っこええやろ」

クロにちなんだのか外壁がまっ黒。果たして中も黒で統一されて
いるのか。

「全部クロさんが一人でつくったんですか？」

「せや。一匹でな」

一匹のリスがつくったツリーハウスとしては、すごいと思う。扉
も壁も煙突も黒で単色なのにすごいオシャレ。人間には小さいけど、
昔こういうのに憧れてたからちよつと嬉しい。

気がつくくと、クロはもう階段の上にあった。

「郁、まあ上がって。せまいけど」

急いで階段を上り、お邪魔します、と中へ。

「コーヒーでええ？」

「あつ、コーヒーお願いします」

やはり内装もまっ黒。机も椅子も黒で統一されている。暖炉もある。外から見えた煙突とつながっているのだろう。

そして、黒の中でいろいろな宝石がきらめいている。もしかして、今までに盗ったものだろうか。

一通り見おわってから、気になっていたことを質問してみる。

「あの、俺は怪盗になるんですか？」

「せや」

「えっ、怪盗って怪盗キッドとか怪盗ジョーカーとかのあの怪盗ですか!？」

「答え（解答・回答）のことでも溶かす（解凍）ことでもなく、その怪盗や。なんや、嫌なんか？」

でもな、とクロは続ける。

「断わるにはもう遅いで。次の仕事は今日なんや。今五時やから七時に出発すんで。ほな、一回帰ってええよ。とりあえず三十分後くらいにさっき会うたところに来てや」

「わかりました」

森の入り口までクロに送ってもらう。ダッシュで家に帰り、母さんに外出許可をもらう。

「早く帰ってきなさいよ」

ごめん、たぶん無理。心の中であやまる。

急いで森のそばへ向かう。クロはもう来ていた。今度は木に登っ

ていない。

「ほな、ブラックハウス帰るで」

そう言ってクロはずんずん進んでいく。俺は慌てて追いかけた。

「時間もないさかい、はよ上がり」

はい、失礼します、と中に入る。

「えーつと、今日の仕事なんやけど、N美術館にあるストロベリー
ルビーっちゅう宝石を盗る進入経路はここからで……」

地図を見ながら一通り説明され、頭にたたき込む。

「覚えたか。そろそろスーツに着替えてくれ」

「はい」

特殊な素材なのか、ぴったりフィットする。「準備ええか。そして
ら、俺がせーのって言うたら、N美術館の屋上って強く念じるんや。

いくぞ、せーの！」

N美術館の屋上、N美術館の屋上……と念じていると、急に体が
軽くなり、すぐに硬いものの上に落ちた。体を起こすと、そこは：

：

「N美術館の上だ。すげえ。クロさん、もしかして今の瞬間移動で
すか？」

「せや。スーパースーツのおかげやで。それにしてもパトカー多い
な。予告状出したからやるか。ま、狙いがいがあるけどな」

「えっ、予告状出したんですか？」

「当たり前やん。出さんかったらただの泥棒や。そらそーと、あな
いに仰山警察がいてると、大変やから覚悟しとき」

「はい」

「あっ言い忘れとったけど、そのスーツ念じれば基本何でもできる
んや。よう覚えとき」

行くで、と言ってクロはドアへ向かった。俺も急ぎ足でついていく。ドアの向こうの階段を降りると長い廊下が。そこで待っていてくれたクロからゴーグルを受けとる。

「これをつけると、赤外線センサーとかが全部見えんねん。この先はずっとつけとき」

すぐに装着すると、センサーが見えた。もし今渡されなかったら……と考えると恐ろしい。

不思議なことに、いくら進んでも警察官と会わない。あまりにも警備がうすすぎる……と思ったとき、クロに、

「ここや」と呼ばれた。

ドアを開け、ゴーグルでセンサーがなにも無いことを調べると、俺達は宝石へ近づいた。

「うわぁー、すげえ」

「すごい」しか思い浮かばない。中二の脳ではたえようのない美しい輝きだった。

「さあ、これを持って帰りましょう」

「あっ」

待った、というのが遅かった。俺が触れたと同時に、警報音が大きく鳴り響いた。

ドン、と音を立てて四ヶ所の扉があいた。ずらっと並んだ制服警官の前で、ぼっちゃりとしたチョビひげの男が拡声器を持ってしゃべり出した。クロが俺の肩に飛びのる。

「ひさしぶりだな、怪盗ブラック。今日は仲間のブルーと一緒にか。

ブルー、俺はな、お前の仲間ブラックを追っている藤本警部だ……」

途中でクロが俺の耳もとでささやいた。

「郁、せーのって言うたら入って来た扉に向かって走れ。出たら屋

上へ戻るぞ。ええな」

「はい」

小さな声で返事をする。

「今日という今日はつかまえてやる！」

警部が俺達を指さす。

「かかれえー！」

「せーの！」

クロと藤本警部の声が重なった。

入ってきた扉を目指し、走った。すぐに警察が迫ってくる。

「このスーツの瞬間移動は二回で一セットでな。どこかへ移動したら、移動したところからもといた場所へしか戻れんのか。せやから、屋上へ向かわなあかんねん」

「それなら最初から宝石の部屋へ飛んじやえば良かったのに」

「それはつまらんやろ。今日は郁の初舞台やで。楽しまな損やないか」

初めて会ったリスが、こんなに優しいなんて……。感動して泣きそうになった。

話している内に屋上についた。扉を閉めて体で押さえ、ブラックハウスと念じる。

俺達は仕事を終え、無事戻ってきた。

「やりましたね、クロさん！」

「ああ、そやね」

そう言ったクロの顔は嬉しそうでもあり、悲しそうでもあった。

「はよ上がって着替え」

はいと返事をして家に入りすぐに着替えた。

コーヒーを入れてくれたクロといっしょに黒革のソファーに座る。

「郁、今日はおおきに。正直な、郁がおらんと逃げられんかったと思う。そやから、また手伝^{てつと}うてほしい」

俺はほっとした。しかし、クロが続ける。

「けどな、このことを誰にも話して欲しくない。ほんで色々考えたんやけど、あんたの記憶を消さしてもらおう」

次の仕事の時は、また呼びに行くさかい、と言って、スーパーズを着たままの小さな手を俺に向け――。

気がつく俺は家の近くの森のそばにいた。

「何してたんだっけ、俺……？」

とつぶやいてみたが、森が答えてくれるはずもなかった。

そのちようど一ヶ月後、俺は帰り道に黒いリスと出会った。
